

津村修二短編小説

悩める占い師たち

nayameru-uranaishitachi

surou-na-jikan

スローな時間

shuji tsumura short story
nayameru-uranaishitachi
surou-na-jikan

津村修二 短編小説 「悩める占い師たち／スローな時間」

目次

「悩める占い師たち」	4
「スローな時間」	7

「悩める占い師たち」

私の名は神岡。占い師だ。これまで多くの人々を占いによって救ってきたつもりだ。そういった自負は、少なからず持っている。

しかし、私は自分を占うことは出来なかった。やはり自分となると、主観が邪魔してどうしても客観視出来ないのだ。例えば、そこに願望や恐怖などといった余計な主観が入るからだろう。自分を占える占い師も多くいるが、私にはそれが出来なかった。なぜなら、自分で言うのも何だが、私の占いは本当によく当たる。もし、信じたくもない結果が導き出されたとして正気でいられる自信は無い。諸刃の剣のようなものなのだ。

それでも自分の運命が知りたかった。そういった占い師がどうするかというところ、同業者に占ってもらうのだ。つまり、占い師に占ってもらうのだ。ただ、占い師ならば誰でも良いわけではない。私ほどのレベルの占い師になれば、相手の占う姿さえ見れば、その実力がわかってしまう。相手もそれなりの実力者でなければ、全く意味が無いのだ。そもそもなぜこういった話を始めたかというところ、実は一昨日、私宛に一通の封書が届いたからなのだ。差出人の名は、占い師のみを占う占い師、とあった。文面の内容は、私のような自分を占えない悩める占い師たちを救いたい、とのことだった。その占い師の所在を示す地図も同封されていた。

——この者だ——

私は心の中でそう確信した。

——占い師のみを占う占い師なんて、きっと相当な実力者に違いない。この者ならば、自分の運命を占ってくれるはずだ——

そして今、私はその占い師のいる扉の前に立っている。
私は感極まっていた。

——遂に私自身の運命を占う実力者と会えるのか——

扉を開けると、そこには一人の男が座っていた。男は先に口を開いた。

「あなた様は？」

「封書を頂戴した神岡ですが」

「神岡様、お待ちしておりました」

「あなたが占い師のみを占う占い師なのですか？」

「ええ、僕がその占い師です」

「本当に私を占っていただけなのでしょうか？」

「もちろんですとも」

「ありがとうございます！お金ならいくらでも払いますので」

「何をおっしゃいますか。無料で占ってあげますよ」

「無料なのですか!？」

「はい。悩める占い師を救う、これだけが目的の慈善活動なのですから」

「何と素晴らしい。それでは、さっそく占っていただけますか？」

「その前に、お手並みを拝見させてもらいたいのですが」

「……お手並み、ですか？」

「はい。僕を占って下さい。それによつて、神岡様が救う価値のある占い師かどうか、判断したいと思いますので」
「なるほど」

私はその者を占った。彼はその結果を真剣な眼差しで聞いていた。

「合格です。あなた様は救う価値のある占い師です。さあ、占いましょう」

彼はそう言うのと約束通り、私のことも占ってくれた。期待通りの実力者だった。

私は彼の占いで自分の運命を知ることが出来た。思ったより平凡な運命のようだ。

「ありがとうございます」

彼に礼を言った。すると、彼の方から意外な返答があった。

「こちらこそ、ありがとうございます。おかげで救われました」

「……救われた？」

私が尋ねると彼は続けてこう言った。

「悩める占い師、とは僕のことでもあるんです。実は僕もあなた様と同じく、自分の運命を知りたかったのです。でも、僕の占いは怖いほどよく当たる。だから、自分では占えない。そこで、多くの占い師たちに封書を出したんです。自分を占えない占い師を救う、という名目でね。真の占い師なら、怖くて自分のことを占えないのが当然ですから、きつとここへやって来る占い師は、僕と同じ悩みを抱えた真の占い師だろう、そう思いました。神岡様から占ってもらい、運命を知り、何だか……覚悟が出来ました」

私の占いは本当によく当たる。しかし、この時ばかりは外れてほしかった。(完)

「スローな時間」

社内は始業の慌ただしさに包まれていた。

「はい、これ今日の納品伝票ね」

事務員の吉村は束になった伝票を営業部の澤野へと手渡した。

「大量ですね……こりやまた、帰りが遅くなりそうです」

「良いじゃないの、若いうちは忙しいくらいが丁度良いのよ。あたしみたいに年取って腰痛になってからじゃ、いくら働きたくても身体が言うこと聞かないんだから」

「そうですね、吉村さん。こいつは根性無しなんですよ」

やりとりを聞いていた澤野の同僚の竹下が口を挟んだ。

「竹下の方こそ、いつも愚痴だらけのくせに」

澤野も負けずに言い返した。すると、奥の方から怒鳴り声が出た。

「おい！口ばかり動かしてないでさっさと仕事しろ、仕事！」

上司の原口部長だ。二人は蛇に睨まれた蛙のように大人しくなった。

澤野は大学卒業後にこの会社に入社し、もうすぐ三年が経とうとしていた。主に清掃用品のレンタルサービスの事業を扱っている会社である。給料は良いとは言えなかったが、それでも人間関係に恵まれていて、仕事自体のやりがいもあって、澤野は満足していた。澤野の仕事は営業車で担当エリアの顧客ルートを回り、レンタル用品の交換を行

なったり、新規開拓の営業を行なったりする仕事だ。

その日の朝も澤野は交換用の新しいモップやマットを車に積み込み、車内でラジオを聴きながら最初の顧客先へと移動していた。

「竹下の野郎、ふざけるなよ」

前を走る竹下の車にそう呟いた。先ほどの怒りの余韻がまだ残っていた。

竹下は同じ営業部の社員のだが、澤野に比べると、とにかく要領の良い人間だ。世渡り上手で調子が良く、澤野ばかりが毎度のように損をする立場になる。しかし、そんな竹下のいい加減さが時に羨ましくもあった。澤野は根が真面目過ぎるのだ。

「くそつ、僕も竹下みたいになれたらなあ……」

全身から吐き出すように言った。

こういった独りきりの時間が多い仕事はどうしても独り言が増えてしまう。澤野も例外ではなく、むしろ、独り言はかなり多い方であった。

何気なく腕時計に目をやると、時計の針は九時前を指していた。

「あれ？……何だか、今日は時間が経つのが遅く感じるなあ」

頭がぼんやりとしていた。日頃の寝不足が原因だろう、すぐにそう思った。特に昨夜は見積書の作成で夜遅くまで残業していたのだ。帰宅したのは深夜だった。仕事中毒とも言えるほど熱心によく働いていた。

最初の顧客先へと着いた。老舗の天ぷら屋だ。

「おはようございます！いつもお世話になっております！マットの交換に伺いました！」

「はあい、よろしく」

眼鏡を掛けた五十代前半の温厚そうな店長が対応した。挨拶を済ませ、マットを数枚交換した。

「交換が終わりましたので、伝票にサインをお願いします」

「はあい、御苦労さん」

厨房で仕込み作業をしていた店長が作業を中断し、澤野の元へ向かった。

「最近、景気の方はどうだい？お兄ちゃん」

そう言いながら、店長は伝票にサインをした。

「……………」

「……ねえ？どうしたの？顔色悪いよ、お兄ちゃん」

「……あ、えつと、その……すみません」

「大丈夫かい？」

「……だ、大丈夫です」

「無理しないでよ。身体が資本なんだからさ」

「……ご心配かけまして、申し訳ございません」

一礼して店を出た。

車に戻り、次の顧客先へと車を走らせながら考えていた。

——これは一体どういうことだ？どうかしてしまったのか？まるでスローモーションのように、すべての動きが遅

く感じる。自分のマットを交換する動きも、店長の話す言葉も。こうして運転している今だって、車はゆっくりと動いているように感じるし、このラジオからもパーソナリティのあの軽快なトークは姿を消しているじゃないか——
気持ち悪くなってラジオを止めた。

「今日こそは早く帰って寝よう。それが一番だ」
考えるのも止めた。

それから十件ほどの顧客先を回った。不思議な感覚は続き、それはより酷くなったように感じられた。耳は次第に聞こえにくくなり、目はほんの少しだが色の感覚を失いつつあった。それでも澤野は仕事を続けた。

昼の時間になったので、公園に車を停めて買っておいた弁当を食べることにした。この公園に駐車して、車の中で独り食べることが多い。弁当の蓋を開けようとした時、携帯電話が鳴った。竹下だ。

「お疲れ。今、電話大丈夫か？」

「え？……何て？」

「……いや、だから、電話大丈夫かって」

「ああ、構わないよ。ごめん、耳が今ちょっと聞こえづらくて」

「耳が？いつから？」

「いや、ついさっきぐらいから」

「それって、突発性難聴じゃないのか？俺の知り合いにいるんだよ。突然、聞こえづらくなったりってヤツが。病院行ったら、そう言われたらしい」

「もしかしたら、僕もそうかもしれない」

「早めに診てもらった方が良いぞ」

「え？もう一回言って」

「早めに診てもらった方が良いぞ」

「ああ」

「……じゃあ、これから大きな声でわかりやすく話すからな」

「助かるよ」

「澤野さあ、両面テープ持ってるか？」

「両面テープ？持ってるよ」

「実は、お客さんからマットがずれるっていうクレームが入ってな。で、両面テープでマットを固定しようと思ったんだけど、今日ちようど切らしてて。で、お前なら持ってるかなと思って電話したんだ。お前、今どこ？」

「いつもの公園」

「あそこか。じゃあ、すぐ向かうよ。十五分後くらいに着くと思う」

そうして、竹下は時間通りに澤野の居る公園へとやって来た。

「澤野！ごめんなあ」

「別に良いよ。気にしないで」

澤野はそう言うと、竹下に両面テープを渡した。

「ありがとな。それより、耳は本当に大丈夫か？」

「そのことなんだけど……ちよっと、話せる？」

「ん？どうした？」

「……僕、今朝から時間が経つのが遅く感じられるんだよね」

「何だ、それ？耳と一体どんな関係があるんだ？」

「いや、自分でもおかしいことを言ってるのはわかるんだけど、とにかく時間がとても長く感じられるんだ」

「それなら言わしてもらおうけど、それって、ただ単に退屈なだけなんじゃないか、仕事が」

「退屈？」

「ほら、休日の時間なんかは、楽しいから短く感じるだろう？それと一緒に、お前は仕事が楽しくないから長く感じるんだよ。俺なんか、忙しくて忙しくて、今日なんて特にもう時間が足りないくらい短く感じるぜ」

「ああ……残念だけど、そういう問題でも無いんだよ」

「なら、どういう問題だっというんだ？」

「驚くなよ……例えば今、竹下と会話している言葉もスロー再生しているように聞こえてるんだ」

「は？スロー再生？」

「そう。それも声だけじゃない、動作だってスローに感じる」

「おい、冗談は止せ。何のつもりだ？」

「冗談なんか言っていない。それに、色の感覚も無くなってきている」

「怖がらせるな。な、嘘だろ？」

「信じてくれ、本当なんだ」

「お前は病んでるよ。ストレスだな、きつと」

「ま、待ってくれ」

「な、ゆっくり休め。疲れてるんだよ！」

「竹下！」

「じゃあな、俺、急いでるから！」

竹下はそう言うとう自分の車へ逃げのように駆けて行った。

澤野はその一時間後に死んだ。

事故だった。

交差点で澤野が運転する車に信号無視のトラックが激しく衝突したのだった。

両者とも即死だった。

翌日の夜、通夜が行なわれた。突然の不幸にすすり泣く声があちらこちらで聞こえた。

早過ぎる別れに会場は悲しみの底に沈んでいた。

「俺が、俺が……あいつを見捨てたからだ……」

竹下は事故の知らせを聞いた時から、ずっと自分を責めていた。

「もう……竹下君のせいじゃないって……」

吉村は竹下から最後に会った澤野の様子がおかしかったことを聞いていた。そして、竹下がそれを助けなかった自分を責めているのを知っていた。

「竹下……澤野は事故だったんだ。不運としか言いようが無いよ」

原口も同じく竹下の気持ちを知っていたため、そう慰めた。

通夜の帰り道、竹下は考え事をしながら歩いていた。訃報を聞いて以来、考え続けていることがあったのだ。それは、

——スロー再生とは何のことだろうか？——

ということだ。

——これは事故と何らかの関係があるはずだ——

ここまでの考えまでは及んだ。だが、そこから先は毎回わからなくなる。ぐるぐると思考が回り、螺旋階段のように終わりのも無く続いていく。

その時、部活帰りと思われる男子高校生四人組が自転車で通り過ぎた。竹下も高校時代は自転車通学だったので、その姿を見た時、高校時代の自分を思い出した。そして、そこに謎を解く重要な手掛かりがあることに気付いた。

——そう言えば、あの時——

高校生の頃、自転車で通学途中にバイクに撥ねられたことがあった。その時もスローモーションのように、撥ねられる瞬間、わずか一、二秒であっただろうが、十数秒のように長く感じられた。その間に冷静に状況判断が出来た。そうして、撥ねられた後に受け身が取れたため、幸いにも軽傷で済んだのだった。

——あの時、音が聞こえなくはならなかったか？色が無くなりはしなかったか？——
記憶を辿ってみると僅かな記憶だが、そんな気も少ししたのだった。

急ぎ足で帰宅して、すぐにパソコンを立ち上げてインターネットであらゆるサイトを調べ回った。

その結果、やはり人は危機的状况に陥ると、時間がスローモーションのように感じられるようになっていくことがわかった。

緊急事態において最も重要視される感覚が視覚であり、その事態に陥った場合、他の感覚を遮断して視覚に集中させるため、極めて大量の視覚情報が得られる。よって、通常の何倍もの高い動体視力が得られ、それで時間が止まったように感じるといふわけだ。人はそのスローモーションの間に、危険を回避することが出来るのだ。

ただ、その代償として、耳が聞こえなくなったり、視覚情報の効率化を高めるために色の情報が無くなったり、という弊害も起こるわけだ。

——これはまさに澤野の症状そのものじゃないか。しかし、トラックとの事故に遭ったのは、俺と会ってから数えども一時間後だ。あいつは、今朝から時間が遅く感じる、と俺に言っていた。そんなにも前から、危機的状况を察知していたというのか——

解けかけた糸が、また幾重にも絡まった。

その翌日、澤野の葬儀と告別式が行なわれた。

その日も仕事中、竹下はそのことで頭が一杯だった。魂が抜けたように仕事は上の空だった。

仕事終わり、時間は夜十時を回った頃、社内には原口と竹下のみが残っていた。原口は竹下に声を掛けた。

「竹下。言っておくが、あまり気を落とすな」

「すみません」

竹下は原口に一部始終を話してみることにした。話すことで、何かがわかるかもしれない、そう思ったからだ。すると、原口から澤野の症状について彼なりの見解が述べられた。

「……そうだな。私が考えるに、澤野は死への危機感が異常に強かったのではないかな。だからこそ、それを察知する力が強力に働いて、死の何時間も前からその症状が出たんだろう」

「死への危機感ですか？」

「そう。生きたい、という生命力とも言えるがな。それがとても強かったんだろう」

「しかし、それなら、なぜ死を回避出来なかったんですか？」

「……………それは私にもわからない」

「なぜ何ですか？なぜ、あいつは死んだんですか？なぜ？なぜ！？」

「竹下、落ち着け！」

「……………やっぱり俺のせいだったんですよ」

「君、何を言ってるんだね！？」

「俺が見捨てたから、あいつはそのショックで生きる力を失ったんですよ」

「馬鹿な考えは止めなさい」

「俺のせいだったんだ！」

「竹下！」

竹下は会社を飛び出し、夜の闇に消えて行った。

河原のベンチに腰掛けた。空には輝く満天の星があった。しかし今、その美しさがとても憎らしかった。醜い自分を嘲笑うかのようで腹が立ったのだ。

亡き澤野へと涙ながらに呟くように語りかけた。

「澤野、ごめんなあ。俺、何であの時お前を信じてあげられなかったんだろう。信じてさえいれば、お前が死ぬことはなかったはずなのに。俺がお前に出来る償いは何だ？教えてくれ。何だってするよ。お前が望むなら、死んだっていい。なあ、何とか言ってくれ」

「竹下、顔を上げろよ」

「澤野！」

そこには死んだはずの澤野が立っていた。

「お前……死んだんじゃないのか？」

「ああ、死んでるさ」

「死んでるって……ちよつと待て……じゃあ、今見えているお前は？」

「さあ？幽霊っていうヤツじゃないかな？」

「幽霊……か。本当に見えたりするんだな」

「そうみたいだね……それより、何をそんなに泣いてるんだよ」

「……澤野、ごめんな。お前に謝りたいことがあるんだ。聞いてくれ」

「知ってるよ」

「え？」

「何か誤解してるみたいだから、その誤解を解きに来た」

「誤解？」

「そう。竹下がそうやっていつまでも泣いているから、僕は成仏出来なくて困ってるんだ。それで今日はここへやって来たんだ」

「じゃあ、俺が何を誤解してるっていうんだ？」

「僕は竹下のせいで死んだんじゃないんだよ」

「お前は俺に見捨てられて、死を決意したんじゃないかったのか？」

「確かに信じてもらえなかったのは辛かったよ」

「ほら、やっぱりそうじゃないか」

「でもね、誰だってあんな話、信じられないと思うんだ」

「恨んでないのか？」

「ああ、それくらいで恨むようなことはしないよ。死ぬこともしない」

「それじゃあ、何で死んだんだ？これは原口部長の推測だが、お前はかなり死への危機感が強かったのか、そのおかげでスローモーション現象が普通の人間よりも格段に早めに起こった。そうだよな？」

「そうだね。僕もそう思う」

「ということは、死をより回避出来る状況にあったということだな？」

「ああ」

「にも関わらず、お前は死んだ。それが理解出来ないんだ」

「……死を自ら選んだんだよ」

「なぜだ？なぜ自ら死を？」

「……なぜかと言うと、それは事故の状況に関係するんだけど」

「事故の？」

「事故はさ、トラックが東西を進む道路にいて、僕の手が南北を進む道路にいて、その交差点で起きたんだけど、ぶつかって来たトラックの運転手は居眠り運転をしていたんだよ。信号は赤にも関わらず、トラックは交差点の真ん中へ突っ込んでいた。僕は信号が青になったので発進して、交差点の真ん中へと進んでいた。このままだったら右から突っ込んで来たトラックと衝突するなあ、とスローモーションの中で感じたよ」

「なら、ブレーキを掛ければ助かったじゃないか！」

「僕も最初はそう思った。けど、ふと左側を見ると横断歩道をまだ五歳くらいの女の子が渡ってたんだ。もし僕がブレーキを掛ければ、確実にトラックはその女の子にぶつかっていた」

「お前、その子を死なせたくなくて、それで自ら死を選んだのか……」

「ああ、そうだよ」

「お前ってヤツは、どこまでお人好しなんだ……」

「だから、後悔は無い。竹下も僕のことには気にしなくて良いから」

「わかった……」

「よし、これでやっと成仏出来るよ」

「迷惑掛けちゃったな」

「良いよ……あつ、さっそくお迎えの時間が来たみたいだ」

「もうお別れか……澤野、俺はお前と出会えて本当に良かったと思ってる」

「何だよ、急に……」

「ありがとな。忘れないよ、お前のこと」

「ああ。僕も忘れないよ。今までありがとう」

「……最後に一つ、お前に聞きたいことがあるんだけど、聞いても良いか？」

「何？」

「俺に何か出来ること無いか？」

「え？」

「お前のために、何かしたいんだよ」

「そうだなあ……それなら」

気が付くと朝だった。鳥たちの声が目覚まし時計代わりに、竹下を起こしてくれた。

河原には柔らかな朝の光が差し込んでいた。

「いつの間にか眠ってたんだなあ……あ、やばい。遅刻だ！」

ベンチから体をぐいっと起こすと、会社へと急いで走った。

相変わらず、社内は始業の慌ただしさに包まれていた。

「おはようございます！」

「あらあら、遅刻よ。竹下君」

吉村が笑顔で竹下を迎えた。

「重役出勤かね？」

原口がほっとしたような表情で冗談を言ってみせた。

「勘弁して下さい！寝坊しました、すみません！」

竹下は元来の調子の良いキャラクターをすっかり取り戻していた。頭を下げ終わってから、二人に改まってこう言った。

「吉村さん、原口部長。澤野から伝言を預かっています」

「澤野君から？」

「澤野から？」

「はい。今まで本当にお世話になりました。ありがとうございました、と」

「まあ……」

「……そうか」

「吉村さん、腰痛には気を付けて下さい。原口部長、働き過ぎには注意して下さい、とのことですよ」

竹下はそれを伝えると、遅れを取り戻すように仕事にさっと取り掛かった。

老舗の天ぷら屋。竹下の車が停まっていた。

「お兄ちゃんみたいな人が死んじゃうなんてね」

店長は驚きを通り越した無表情の顔でそう言った。

「澤野から伝言を預かっています」

「伝言かい？」

「店長、今までありがとうございました。店長の優しい言葉にいつも励まされてました、と」

「お兄ちゃん……そんなことをあなたに伝言したのかい？」

「ええ」

「励まされてたのは、私の方なのにね……お兄ちゃんには言っていなかったけど、私、息子を亡くしてましてね。まだ五歳でした。息子も車に撥ねられてね。ちょうど生きてたら、お兄ちゃんくらいだったから、私にとってはお兄ちゃんは息子みたいなものだったんですよ。私は、私は……息子を二人亡くしたようなものですよ」

店長は眼鏡を外して、わんわんと号泣した。

その後も澤野からの伝言を届けるべく、何十件もの顧客先を回った。

信号待ち。保育園児の子供たちが楽しそうに横断歩道を渡っていた。

竹下はこの子供たちの笑顔の奥に澤野の姿を映していた。(完)

著者略歴

津村 修二（つむら しゅうじ）

1983年福岡生まれ。日本放送協会学園高等学校卒業後、数社で営業職を経験。
2011年に独立し、「ツムラクリエイション」を開業。現在、オリジナル
すごろく、ボードゲーム、書籍の制作と販売などの事業を展開中。

津村修二 短編小説「悩める占い師たち／スローな時間」

2011年10月9日 発行

著者 津村 修二

発行者 津村 修二

発行所 ツムラクリエイション

〒819-0031 福岡県福岡市西区橋本 2-21-3

<http://tsumura-creation.com>

お問い合わせ先 info@tsumura-creation.com

Printed in Japan

(C) 2011 TSUMURA CREATION All Rights Reserved.

◆本書は著作権法上の保護を受けています。著作権者およびツムラクリエイションによる事前の同意なしに、本書の一部あるいは全部を、無断で複写・複製、転記・転載することは禁止されています。